

360°

フォトジャーナリスト

宇田 有三



朝霧(もや)のぬけきれない中、水くみに出かける—エルサルバドル・サンアントニオ村

テという地方都市を訪れた。首都から出るバスは、日本でも走っていないようなボルボ製のデラックスバス。約一時間、日本の高速道路を思わせるハイウエーを走って、ソンソナテの中心部に到着。驚いたことに、そこにはショッピングモールが姿を現していた。二〇〇一年、コロソという現地通貨が米ドルとなった。その影響は目に見える形で出てきている。

夜八時過ぎ、真っ暗な家の中。土間に吊ったハンモックで寝返りを打つには、少々肩と背中が窮屈だ。隣の部屋では、鼻をすするような寝息にまじって、時に寝言が聞こえてくる。あらためて気づいたことなのだ

電気も水道もない

が、寝言も当然スペイン語である。ここは、中米七カ国の中で国土が最小の国エルサルバドル。首都からバスを乗り継いで三時間、隣国ホンジュラスに近い、山奥のサンアントニオ村に入った。

たたましい声を上げる薄暗い中、湧き水や井戸水を汲むために、家を後にする女の子どもの姿を見かける。会場は、今の経済政策を支持する人びと五千人が集むために、熱気に包まれた。エルサルバドルは八〇年代の東西冷戦当時、多くの犠牲者を出した「熱い戦争」の場になった所でもある。出した。

宿を提供してくれたロメオさん(五三)は、五時過ぎに三十九歳と若い。就任式の

のパーソナリティー出身のか左かの主義主張に巻き込まれた。

目の大統領である。ラジオ立ち上がった人びとが、右はすっかり無くなっている。内戦中、当知人に会うためソンソナ

「電気も水道もない村の」

「電気も水道もない村の」